

## 旧金沢陸軍兵器庫：石川県立歴史博物館の歴史的なレンガ造りの建物

石川県立歴史博物館は、20 世紀初頭に旧陸軍の兵器庫として使用された 3 棟の赤レンガ造りの長大な建物を利用している。1909 年、1913 年、1914 年に建てられたものである。これらの建物は、世紀末の軍事建築と、日本が短期間で煉瓦を建築材料として使用したことを示す重要な例である。

### 歴史的背景

20 世紀初頭の国家建築は、西洋のモデルから大きな影響を受けていた。日本は 2 世紀にわたる鎖国を経て、1854 年、はるかに優れた火力を持つアメリカ海軍の艦隊が来航し、強制的に開国させられた。このとき日本は、欧米諸国とのパワーバランスの崩れを自覚し、急速な近代化の道を歩み始めた。当時、日本の指導者の多くは、建築を含む西洋文化の要素を取り入れることが、その差を縮める早道だと考えていた。外国人建築家を招聘することもあれば、国内の建築家が独自に西洋建築の外観を模倣することもあった。19 世紀後半、赤レンガはヨーロッパ建築を連想させるため、流行した。東京駅などの官公庁の大プロジェクトに対応するため、国産レンガの生産が盛んになった。しかし、地震の多い日本には不向きな材料であったため、わずか数十年で使われなくなった。

### 主な特徴

1983 年から 1990 年にかけて行われた改修プロジェクトで、3 棟の赤レンガの外観が当時の姿に復元された。いずれも 2 階建てで、建物は全長 85～90m、急勾配の切妻屋根に瓦葺きで、棟飾りが付いている。この時代の多くの洋風建築と同様、長辺が左右対称になっている。中央の二重ドアの正面玄関からは、両側が鏡像になっており、それぞれの階には厚い柱が組み入れられた一対のアーチ型の窓がある。窓には重厚な黒い鉄格子と頑丈な鉄製の扉があり、かつて内部に保管されていた大砲と弾薬の価値と危険性を物語っている。修復された時点では、これらの鉄製の扉は既にすべて取り外されていたが、修復チームは、第 3 棟の屋根裏部屋で発見された現存する 1 組の鉄製の扉をもとに、これを再現することに成功したのである。

この改修工事では、耐震性の向上と収蔵品の適切な収容を可能にするため、オリジナルの内装の多くを変更する必要があった。しかし、中には意図的に保存されたものもある。第 3 号棟では垂木の上まで見ることができ、また重い兵器を 2 階まで運ぶのに使われたロープと滑車のシステムを見ることができる。第 2 棟のロビーには、レンガの杭や木の支え梁など、当時の支持構造の一部が保存され、建物がどのように建てられたかがわかるようになっている。

### 現在の用途

第二次世界大戦後は、金沢美術工芸大学で使用された後、1972 年に県が管理するようになった。1986 年、石川県立歴史博物館として開館。現在、3 棟の建物には、博物館の展示室や事務室、武家屋敷の宝物を展示する加賀本多博物館がある。

旧金沢陸軍兵器庫は、1990 年に重要文化財に指定された。